

# 復興まちづくりと担い手について

鎌田 千瑛美

一般社団法人ふくしま連携復興センター理事・事務局長  
任意団体 peach heart 共同代表



## 地域コーディネータとして担ってきた役割

震災以降、「福島の実状が分からない」「いまどんなことに困っていて、何が必要なのか」という声をたくさん耳にした。東日本大震災及び福島第一原発事故の影響により地震、津波、原発事故、風評被害の四重苦といわれた福島の課題は複雑化し、一括りでは到底伝わるはずがなかった。

私自身、震災当時は東京にいたため、故郷でいま何が起きている、何ができるのかという葛藤のなか、県内と県外を「繋ぐ」ため、双方の通訳役を担いたいという思いから、福島と東京を行ったり来たりしながら、コーディネータを仕事としてきた。

ただ、きちんとこの問題と向き合うためには、自分の目で故郷の現実をみつめて、ここに生きる人たちの想いに触れていたいと感じ、福島にUターンすることを決意した。

ご縁あってふくしま連携復興センターという組織で、まさに「繋ぎ役」としての仕事に就かせて頂いたわけだが、当時、社団化したばかりで、何もかもがこれから創り上げる状態だった。

そこで、ひたすら現場の声を聴くということに徹底し、「いま、何が課題なのか、必要なことは何か」ということを、地域で活動する方々にお聞きした。

日々の現実に向き合う人たちのなかには、私たちが何をすべきかというヒントは得られないと感じたし、そこを見間違えては、支援は自己満足以外の何ものでもない、と思った。

支援活動の話を書く、個々の活動の先にある課題とその原因を捉える、その課題に対し、必要なヒト・モノ・カネ・情報（ノウハウや先駆事例など）を繋ぐ。時には、中立的且つ客観的な立場にいるからこそその相談役となり、日々悩みながら動くなかでの組織課題や事業展開について、出来る限りで真摯に向き合い、アドバイス（といえるほど立派なものではないが）を行ったりもしてきた。

そして個々の活動をネットワークしながら、共に復興の担い手となる仲間づくりをしてきた。

自らが担い手として、現状の課題解決に向け事業

を「創り上げている人」と「支援したい」側の思いとを繋ぐ。

現場からは求められる感覚は非常に大きいものの、役割としての必要性に気づいている人は、圧倒的に少ないと感じる。なぜなら、「繋ぐ」間の作業は実に見えづらく、成果としても捉えづらいため、お金を稼ぐ仕事にしづらいということが挙げられる。

## 『「繋ぐ」から新たな価値創造の仲間づくりへ』

震災から2年が経ち、求められるコーディネータの役割は、現場ニーズと支援ニーズと繋ぐという単一的なものから、課題とニーズに応じ、マルチステークホルダーが共に地域課題に対して、事業創造するためのハブ機能へと変化しているのでは、と感じる。

なぜなら、より課題は潜在化し、且つ複雑になっているし、ヒト、モノ、カネの資源も3年目を迎え、これまで以上に不足が見えているからだ。事業を新たに創造する過程でより効果的で戦略的な仕組みをつくらなければ、持続可能な復興は到底難しい。何より、復興にとって大事なものは、その地域で担い手となる「ヒト」である。どんなにお金があれど、よい制度があれど、それを自らの地域のためによりよいかたちで創り上げる人がいなければ、意味をなさない。そのことが行政機能のつくる制度や枠組みだけでは置き去りになりがちで、自らの手で創り上げる人、知恵と経験でサポートする人、繋ぎあわせ通訳役となる人応援する人、それぞれの得意分野で役割分担が出来ることが重要なのである。被災地は、自分たちの未来を創り上げていくため、新しい社会価値を創造すべく、信頼できるそれぞれの仲間たちとともに、いま静かに、しかし、力強く、動き出しつつある。そんな中で、私は、あなたは、どう向き合っていくのか、問われている。

## 鎌田 千瑛美（かまだ ちえみ）

南相馬市出身。震災後、フリーランスとして復興支援に従事。11年11月に福島女子のコミュニティ団体「peach heart」を立ち上げる。12年1月にUターンし、(株)ふくしま連携復興センターに勤務。同年7月より事務局長に就任。